私がここにいる理由

経済学部　坂井田　茂昭

はじめに

私は『Book-aid』という団体に所属する経済学部の四年生です。この団体は東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市の図書館を再建するため、古本を回収し、業者に買い取ってもらい、販売額を全額寄付する活動を行っています。

この団体に所属してから約一年になりますが、一年前の私は当初Book-aidとは何の関わりもなかったばかりか、その存在も殆ど知りませんでした。

そんな私が初めて陸前高田に訪れたのは、三年生の七月末のことで、夏休み前に今の代表者である太田君から「フィールドワークに行くけど来ない?」とたまたま誘われたことがきっかけでした。

今まで地震や津波について深く考えることのなかった私にとって、陸前高田での経験は、私の震災に対する考え方を改める転機となり、現在活動を続けているモチベーションになっています。

初めて陸前高田を訪れたときのこと

陸前高田までは、まず仙台へとバスで向かい、そこからレンタカーで移動しましたが、その道中でもたくさんの衝撃的な光景を目の当たりにしました。

例えば、仙台市の地下鉄東西線の荒井駅には資料館が併設されており、自らも被災された職員の方からお話を伺うことができるのですが、津波が到達した地点のお話を伺ったのちに外へ出てみると、ある場所を境に建物が新しくなっていました。

また、沿岸部の震災遺構である旧荒浜小学校では、変わり果てた学校の姿と共に、津波の悲惨さや如何にして逃げ延び避難生活を送ったのか見学することができるのですが、屋上に出て周囲を見渡してみると、どこまでも果てしなく続く更地と、海岸には大きな防潮堤が見えるのみでした。

実感が湧かなかった私は、どこかの外国か異世界の景色でも見ているような感覚でした。それほど衝撃的な光景だったのです。

しかし、陸前高田はもっと違ったなにかでした。

震災から七年が経過していたこともあり、どんな街に復興したのかなくらいの考えだったものの、いざトンネルを抜けて市街が見えてくると、そんな考えはどこかに吹き飛んでしまうくらいの光景が広がっていました。

何もないんです。沿岸部まで出てから振り返ると、かさ上げ

されたその土地は、まるで大きな山のように見えました。見かける車はほとんどダンプカーで、土を満載にして走っていました。

中でも一番衝撃的だったのは圧倒的なまでの防潮堤の存在感とその大きさです。高さ一二・五mの防潮堤は作業中のショベルカーが小さく見えるほどの大きさであり、約二㎞にわたって湾を覆うように整備されているため、全くと言ってよいほど海が見えません。

また、到着した翌日にボランティアガイドの方に案内してもらいながら、陸前高田を巡ったときのことですが、海岸付近で建設中のものがあり、私はてっきりアパートを建てているのかと思いましたが、「あれは防潮堤だよ」と教えていただいたときの衝撃は今でも忘れられません。

ただ、愕然とすることばかりでもなく、希望を持てるのではと思うこともありました。

新しい陸前高田市は、かさ上げした市街地の中心部に「アバッセたかた」という商業施設があり、その中に新しい図書館が併設されていました。私はまだBook-aidのメンバーではなかったものの、再建された図書館を見たメンバーが嬉しそうに眺めているところを見て、自分達の活動の成果が形として現れることの素晴らしさを感じました。一方で蔵書はまだまだ少ないため、Book-aidの活動はまだまだ終わらないのだなと再確認しました。

桜ライン311との関わり

私が初めて桜ライン311という団体を知ったのは、この日の午後、代表の岡本さんのもとへインタビューに伺ったときでした。

桜ライン311とは、東日本大震災の大津波の際に、以前から教訓があったにもかかわらず、多くの方が亡くなられたことを受け、もっと助けられる命があったのではないかという思いのもと、陸前高田の津波到達地点を桜で結ぶことにより、震災を風化させずに次世代へと語りついでいこうとしている団体です。

また、代表の岡本さんは、「震災当時地元に居なかったため難を逃れたが、地元の若い人々は地元のために働いて命を落としてしまった。だから、亡くなった人々のためにも語り継がなければいけないのだ」と、活動にかける思いを語ってくださいました。

当時はまだBook-aidのメンバーではなかったものの、現地を訪れて被災地の現状を目の当たりにして、震災についての関心が少しずつ高まっている私にとって、岡本さんの震災に対する思いや植樹を通して伝えたいものはとても共感するところがありました。

そして私は、またここに来て植樹をしてみたいとの思いを胸に東北を後にし、Book-aidに参加しました。

植樹会に行ってみて

私はその後一一月と三月の植樹会に参加しました。植樹は三

人一組ほどで一本一本丁寧に植えていきますが、苗木が重かったり場所が悪かったりすると植えるのに一苦労です。そんな中、毎度違った方々と一緒になるので色んな話をします。「どこから来たのか、今は何をしているのか、なぜ植樹会に参加しているのか……」等々。

ただ桜を植えるだけではなく、見ず知らずの人達と交流を持てる場になっている、そんな交流がずっと続くことこそがこの植樹会の大きな意義の一つだと感じました。

また、植樹会場には地権者さんも見にいらっしゃいます。植樹地点になっている場所は私有地であり、中にはまだまだ震災を思い出したくないという方もいらっしゃって、すべてを繋げるのは何十年かかるかわからないが、それでも少しずつやっていく。岡本さんはこう仰っていました。

学生も、毎度新たなメンバーが参加していて、何かしらの発見を持ち帰ってくれているようです。

3月に植えた桜の苗木

桜を植えることで、維持管理をしながら後世に確実に語り継ぐことができる。しかし、それ以上のたくさんの学びがあるように思います。

おわりに

Book-aidは「愛知からできること」を掲げて活動しています。ボランティアが現地へ行くことが全てではないという意味合いです。ただ、愛知からできることと言えど、実際に運営をしている側だけでもその思いを理解するために、実際に陸前高田を訪れることが重要なのかなと私は思います。

また、私は東北へ実際に足を運んでみて、自分の目で確かめることによってはじめて実感することができました。しかし、それで終わりではなく、見に行った者として周りの人々に語り継いでいかなければなりません。これはとても難題で、実際に見ないとわからないのではないかという思いと葛藤しています。ただ、難題だからこそ挑戦する価値があると私は思っています。

これが『私がここ（Book-aid）にいる』理由です。